

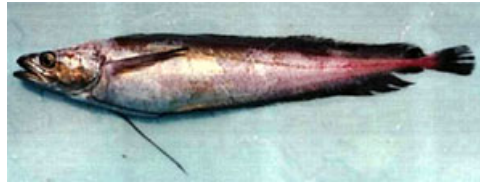
平成21年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 イトヒキダラ

学名 *Laemonema longipes*

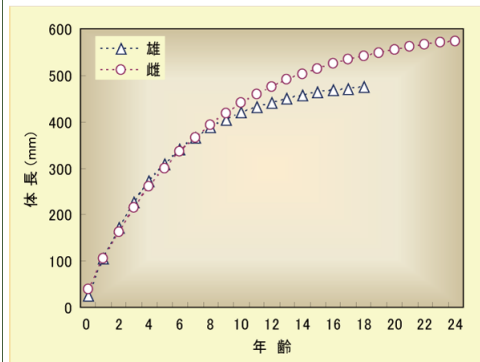
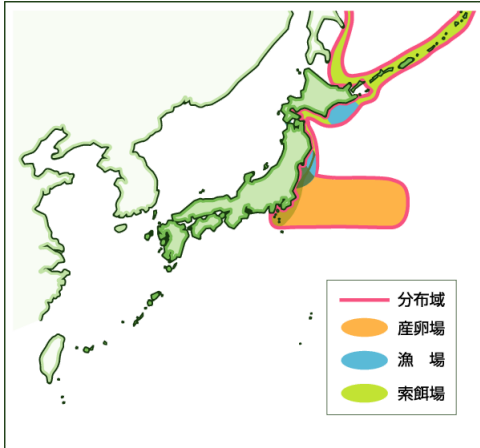
系群名 太平洋系群

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命: 雄18歳、雌24歳程度
 成熟開始年齢: 雄5歳、雌7歳程度
 産卵期・産卵場: 2~4月、本州関東・東北南部沿岸~本州東方の沖合域
 索餌期・索餌場: 周年、本州関東沿岸以北の陸棚斜面域(水深300~1,500m)
 食性: オキアミ類や橈脚類などの甲殻類およびハダカイワシ科魚類など
 捕食者: ムネダラなどの大型ソコダラ類やオットセイ、マッコウクジラ、ツチクジラなどの海産哺乳類

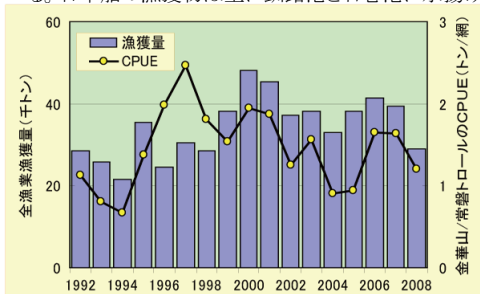


漁業の特徴

本種は1990年代以降に主対象魚として漁獲されるようになり、主に沖合底びき網漁業によって漁獲されている。スケトウダラの代替で練り製品の原料として利用されており、漁獲圧はスケトウダラやその他魚類の漁獲状況によって変化する。また、ロシアに対し日本水域内における漁獲量が割り当てられており、近年はロシア船による漁獲量が増加し、日本船の漁獲量よりも多い。

漁獲の動向

近年の日ロ両国の漁船による漁獲量は1995年の35千トン以降増加し、2000年には48千トンと過去最高を記録した。その後2005年には38千トン、2006年には41千トン、2007年には39千トン、2008年には暫定値で29千トンとなっている。日本船の漁獲物は主に釧路港と石巻港に水揚げされてきたが、近年釧路港への水揚げは減少している。

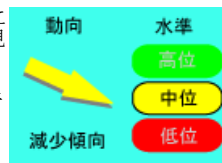
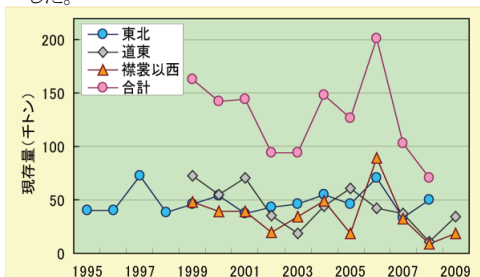


資源評価法

東北および北海道の太平洋側の陸棚斜面域において、主な分布水深帯である水深350~900mで実施した着底トロール調査の結果を基に、面積密度法により現存量を算出した。イトヒキダラは海底から離れた水域にも分布することから、着底トロール調査で得られた現存量は、資源量の指標値として用いた。

資源状態

トロール調査の結果、2007年の東北と北海道太平洋岸の現存量は過去10年間で6番目に多かった一方で、2008年は北海道太平洋岸の現存量が極めて少なかったため、合計の現存量は最も少なかった。また、2009年の北海道太平洋岸の現存量は過去11年で3番目に少ない水準となっている。金華山、常磐海区の沖底のCPUEおよびロシア船のCPUEは長期的に見てあまり変動していない。これらのことから、資源水準は中位、動向は減少と判断した。



管理方策

資源は複数年に一度発生する加入により支えられている。成長が遅く比較的長寿であるため、一度親魚が減少すると回復が困難であることから、親魚量の維持を管理目標とした。北海道および東北太平洋岸で行っているトロール調査から現存量を推定し、その現存量の変動から変化率をもとめ、変化率に過去5年間の平均漁獲量を乗じてABCを算出した。

	2010年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	30千トン	0.83Cave5-yr	—	—
ABCtarget	24千トン	0.8・0.83Cave5-yr	—	—

- ABCは1,000トン未満で四捨五入した

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は減少傾向にある
- 若齢魚の発生には大きな年変化がある
- 資源状態は比較的安定していたが、近年減少が見られる

管理方策のまとめ

- 成長が遅く、成熟年齢も比較的高齢であるため、親魚量を維持する必要がある
- 若齢魚を含めた今後の資源動向を注視することが必要である

平成21年10月20日更新

資源評価は毎年更新されます。